

5. 大正初期の魚屋

長根山 ヌ イ

※明治27年7月5日生、父安川浅次郎、小市妹、仁太郎妻

私たちは、明治41年3月、四国から父に連れられて、興部村七線に入地しました。名寄から歩いて、途中二晩宿泊し、一晚は、中興部岩越駅通に泊まりました。

興部に入地して間もなく、上興部に砂金が出るというので、父たちは旧市街に来て、小さな雑貨店を開きました。

私は結婚して1年程後の、大正5年（12月27日）に、オホーツク海一帯を襲った大津波に、家や、家財道具を全部流されて終わったので、上興部の親のそばに移住して来ました。

大正8年に、今の宮川さんの近くに家建て、魚屋を初めました。魚の仕入れは、中原（孝平、瀬戸牛で魚屋）さんが、馬車で浜から運んで来るのを、分けてもらっていました。

その当時は、鉄道開通前ですから、人の出入りも多く、土方の飯場などもあって、夫はこの飯場を廻ったり、遠く一ノ橋方面にまで売り歩いたものです。

そのころ（入地したころ）上興部には、旧市街に小林、本間、安川の店があり、木村政吉さんが豆腐屋をしており、今の駅前には、火災にあう前の谷さんの店もありました。

兄が料理屋（えびす屋）を初めたのは、私たちが移住してからですが、酌婦が6、7人居りました。この頃の料理屋に、大黒屋（津山治助）いく代（田中長太郎）などがありました。

劇場の新盛座は、私が上興部に移住したころ、できていたようにも思われるが、はっきりしません。最初は数人の株式（共同経営）だったが、後で安川が買い取ったものです。

とに角魚屋で一ノ橋方面まで行くのには、リヤカーもないし、道路も悪く、天びん棒で両はしのかごに魚を入れ、かついで歩いたもので、いま考えると、よくやったものだと思われてなりません。